薬剤師生涯学習の今後

－6年制完成年度を踏まえ－

内山　充氏（薬剤師認定制度認証機構）に聞く

薬剤師の生涯学習について、大学から卒後の生涯にわたるシームレスで一貫した学習の確立を目指す「生涯学習社会」の構築が必要。これはいまや世界の趨勢となっている――と語るのは薬剤師認定制度認証機構（CPC）の内山充氏。また、第三者の視点での的確な評価・認証が伴うことにより、学習者と学習を提供する二つの体制の信頼性が担保でき、社会的信頼を得ることができる。学習者が自ら学習記録を付け、それを職域・地域等で評価することで実質的免許更新制につながると語る。6年制完成年度を迎え、今後の薬剤師の生涯学習のあり方について語ってもらった。

段階を踏んでレベルアップ

薬剤師の生涯学習の方向性には、「どんな薬剤師になるべきか」と「どんな薬剤師が必要か」という二つの視点があります。決意・目標と提言・勧告とも言えるでしょう。

「どんな薬剤師になるべきか」ですが、日常業務の中で患者、世間からは「健康の不安に答えてくれる街の科学者」が最も望まれており、まずはジェネラリストとしての優れた能力・適性を目指すべきです。「生涯研修認定薬剤師」への道です。

その後、自分の得意な領域を選んで勉強して、知識と経験を深めて、「特定領域認定薬剤師」に向かうべきだろうと思います。大部分の薬剤師にとっては、やはり世間一般と患者の視点に応えるのが重要だと思います。

次に、「どんな薬剤師が必要か」となると、より専門の立場で考えることになります。新しい医療の枠組みや疾病構造の変化を考え、医療関係者が何を望み、チーム医療、先端医療が何を薬剤師に期待しているかによって、随時中身が決まってきます。「専門薬剤師」への道です。

従って、世間一般が望む薬剤師像と薬剤師自身が描く姿とは違ってくることがあります。しかし、薬剤師として優れた職能が必要であることには変わりなく、その職能を養う唯一の手段である生涯学習が評価、認証され、信頼性が担保されている必要があります。全ての医療は互いの信頼の上に成り立っているのですから。信頼性こそが、薬剤師が医療職としての職能を発揮する上で、最も大切であるといえます。

生涯学習を論じるには、目的、基本原則、方法論について考える必要があり、現在まで多くの議論がされています。ただ、それら全体を通じて模範解答があるかといえば、「未完成である」という意見が多いのが現状です。

医師や看護師の卒後研修については、法令や行政指導のもとで、検討会や研究会といった公の場で議論されているのに対し、薬剤師は自主性に任されていると言えます。しかし、多くの薬剤師は古くから生涯学習を続けており、学習すべき中身や内容については十分検討されてきています。ただし、基本的な目標、学習体制のあり方など「教育学」としての体系公表がなかったのは事実です。

昨年12月に日本薬学会将来展望委員会から公表された「薬学の展望とロードマップ」の中に「生涯学習新パラダイムの構築」として示された将来展望が、初めてではないでしょうか。

シームレスな体制作りを

また、生涯学習の基本原則は、あくまで自発的学習であり、学習者が主体であるということです。

大学教育は教育者側の発想で行われますが、生涯学習は学習者の発想が優先するという違いをきちんと理解する必要があります。

しかし、薬剤師教育は、大学教育を切り離すのでなく、生涯にわたるシームレスな学習体制を作るというのが世界的な趨勢です。大学と生涯研修実施機関（プロバイダー）とは、薬剤師教育に共同責任をもっています。大学は薬剤師国家試験に合格させるだけでなく、大学での教育内容を薬剤師職能向上に生かすことを忘れず、プロバイダーは学習者に受講単位や資格・称号を与えることだけにとどまわれず、専門倫理を身につけた真に優秀な薬剤師を育てる努力をしてほしいと思います。

その上で私は、「生涯学習社会」の確立を提言しています。学んだ人々の努力に実質的に報い、それらの能力を人々のために、最大限発揮できる社会システムが「生涯学習社会」だと捉えています。

〝患者に役立つ能力〟が大切

薬剤師個人の生涯学習の方法としては、CPDサイクルの実行をお勧めします。自らの目標に沿って成果を確保するための学習方法で、自己査定→計画立案→学習参加→成果の評価、そして次の段階への反映を繰り返し、それを自ら記録にとどめることが大事です。

このCPDサイクルはアメリカで、免許更新のために単位だけを欲しがるCE（継続教育）が広がり、本来の目的が忘れられてしまったという反省に基づき、15年ほど前から取り入れられるようになりました。

ここで大事なことは受動研修から能動研修へと切り替わったこと。そして、薬剤師の生涯学習の本来の目的は単位の取得ではなく、「患者のために役立つ能力を身につけること」であると、改めて認識されるようになったことです。

その際、学習者は、自分の生涯学習履歴を証明するものとして、「学習記録帳（ポートフォリオ）」を持つべきとされています。現在、CPCの認証を受けたプロバイダーでは、それぞれに工夫した研修手帳などを受講者に配布していますので、それらを活用できると思います。

さらにCPDを行うためには受講者とプロバイダーとが、血の通った連携を持っている必要があります。プロバイダーに対しては、CPDサイクルを念頭に、受講者が計画通りに生涯学習を進め正確に記録ができるよう、受講記録がはっきり分かる単位シールを出すなどの配慮をしてもらいたいと思います。

また、ジェネラリストとしての生涯研修であっても、特定領域の認定や専門薬剤師を目指した研修であっても、内容について信頼を得るためには、CPCの認証制度を利用して第三者評価・認証を受けてほしいと思っています。

信頼性の獲得が目標

生涯学習の目標は、専門職倫理に則り、考え、評価し、正しく行動する能力を身につけることです。その結果として最も大切な「信頼」を得ることができます。

具体的に言えば、地域医療の場で専門性を発揮し、人々の健康の不安を取り除く能力です。また各種のチーム医療においては、何が求められていてどうすれば貢献できるかを、適切に判断し行動することができる専門職能です。さらにブレイクダウンすれば、副作用防止や効果的、効率的な薬物療法の設計・提案・介入であり、結果として医療費の節減にもつながります。それらをトータルで見て「薬剤師に対する信頼性獲得」が生涯学習の目標であるといえます。

適切な評価が免許更新制へ

最後に大事なことですが、職域、あるいは地域で権限をもつ薬剤師が、生涯学習に励んでいる薬剤師のポートフォリオをきちんと評価してくれることが必要です。例えば、給与、職制、あるいは人事に反映することです。そのことによって生涯学習の義務化に近づき、薬剤師自身の手による「実質的な免許更新制」につながります。

免許更新制の実現は、法改正など難しい課題を抱えていますが、薬剤師自らの努力の結果として、学習制度の評価・認証と、個人の実質的免許更新制を世の中に知ってもらうことで、薬剤師職能への信頼性と、薬剤師の生涯学習制度の信頼性を、より高めることができると思います。